

【資料 1】 島根民藝年鑑（抄録）（太田直行『島根民藝録』島根民藝会、1935 年刊より）

昭和 6 年（1931）

- 5 月 4 日 九州より柳宗悦を津和野に迎え、太田直行と楠五郎（大阪毎日新聞支局長）とともに「島根工芸診察」（太田命名）の旅が始まる。
- 5 月 7 日 布志名・法恩寺・湯町の諸窯を歴訪し、夕方袖師窯にてぼてぼて茶を、また同夜は松崎水亭にて県観光協会、松江商工会議所連合の歓迎会を、さらに会議所にて講演会を開いた。
- 5 月 8 日 安来にて旅が終わる。
- 6 月 23 日より 3 日間、松江商工会議所で柳宗悦・河井寛次郎から貸与された「正しき工芸品の展観」の開催
- 8 月 2 日 柳・河井両氏が来松し、3 日から 3 日間松江商工会議所で河井寛次郎個展を開催。
- 3 日夜には会場で柳・河井両氏の工芸座談会を催す。
- 8 月 4 日 柳・河井両氏を法恩寺・湯町・布志名窯に案内し、県窯業部のろくろ開きに同席してもらい、夜には皆美館で県下の民藝品を使用した「民藝晚餐会」を開催。出席 13 名。
- 8 月 31 日 浜松で開催の工芸展に県産民藝品を出品。展覧会の出品はこれが嚆矢。
- 9 月 18 日 松江商工会議所で 3 日間、「第 1 回島根県民藝品展覧会」を開いた。
- 10 月 10 日 雑誌『工藝』で袖師窯の番茶器・舩木窯の徳利・湯町窯の鉢などが紹介された。
- 10 月 17 日 京都の大毎会館で「第 1 回山陰民藝展」が 3 日間開催される。
- 11 月 26 日 東京銀座の資生堂で「山陰民藝展」が 3 日間開かれる。

昭和 7 年（1932）

- 1 月 6 日 吉田璋也鳥取民藝協会会長を訪ね、本年度の山陰民藝運動について協議する。
- 1 月 8 日 柳宗悦・高林兵衛を湯町・布志名・袖師などに案内し、品物の選定。
- 2 月 9 日 布志名の舩木道忠が、前月下旬落成の民屋で新古布志名陶器展を催す。
- 3 月 20 日 柳宗悦・吉田璋也が来松し、雑誌『工藝』の用紙と同誌の「布志名号」口絵材料について協議する。
- 4 月 2 日 太田直行が京阪地方の民藝関係者を歴訪して、大阪高島屋での山陰民藝展について協議する。
- 4 月 15 日発行の第 16 号より 12 月 25 日発行の第 24 号まで、雑誌『工藝』の用紙に岩坂の三桎紙が用いられた。
- 5 月 5 日 大阪高島屋で「山陰民藝展」が 7 日間開かれる。
- 5 日夜に民藝座談会が催され、柳・河井・吉田・高林・太田が出席し、「島根民藝の今昔」を語った。
- 5 月 24 日 濱田庄司が来松。25 日より舩木の工房で制作に従事し、舩木・尾野・福岡が手伝いながら指導を受けた。
- 5 月 29 日 夜、皆美館で濱田を迎えて「島根民藝会」の発会式を挙行。出席者 15 名。
- 5 月 31 日 松江商工会議所で濱田庄司の個展を 3 日間開く。6 月 1 日に同会場で濱田を中心に民藝座談会を開催。
- 6 月 6 日 大阪高島屋の工芸品部主任が来松し、付近の工房を案内し将来の取引について協議する。
- 6 月 8 日 柳・濱田が来松し松江市内と湯町方面に案内し、昼夜とも民藝上の打ち合わせをする。
- 9 日は岩坂に案内し、乃木浜の蕎麦屋で民藝同人と両氏への慰労会を開く。
- 6 月 15 日発行の雑誌『工藝』で古布志名焼が紹介された。
- 6 月 23 日 鳥取たくみ工藝店の開店披露展に出品する。
- 7 月 27 日 太田直行が松江放送局より「民藝について」を放送する。
- 8 月 2 日 太田が京都に河井、柳を訪ね、3 日は東京で取引関係者と面談し打ち合わせする。
- 8 月 5 日発行の雑誌『工藝』で古い広瀬緋が紹介された。
- 8 月 8 日 太田直行は島根県に対し柳宗悦を県下の民藝指導者に嘱託することを進言したが、予算の関係上種々曲折の末、ついに実現しなかった。
- 8 月 17 日 柳が来松し、安来の河井方で民藝同人の会を催す。柳は 18 日から 30 日まで清水寺山内の蓬萊院に籠って著述に従事する。
- 8 月 28 日 民藝同人が柳を訪ね、期せずして山陰民藝会の小集になった。
- 8 月 31 日 柳を湯町・報恩寺・布志名・袖師窯に案内し、夕方松江商工会議所で民藝同人十数名が柳を囲んで晚餐を共にした。
- 9 月 19 日 太田は古格ある広瀬緋を蒐集して見本帳を作成し頒布すべく、松江市内の古物商を漁った。
- 10 月 5 日 松江商工会議所で第 2 回島根県民藝展を 3 日間開催した。
- 10 月 26 日 山陰民藝展が南海高島屋で 5 日間開催される。
- 10 月 29 日 島根県商品陳列所に民藝専用の陳列戸棚を設けさせる。
- 11 月 9 日 山陰民藝展が京都高島屋で 3 日間開催される。太田夫妻・舩木・安部（榮）・福岡（定）などが上京。
- 11 月 26 日 柳兼子夫人の独唱会を、昼は県立高等女学校、夜は母衣小学校で開催する。

昭和8年(1933)

- 2月1日 柳宗悦来松。翌日太田が熊野村の民屋と岩坂村の紙漉き場に案内し写真を撮り、さらに袖師・布志名に案内して民藝上の打ち合わせをした。
- 2月24日 大阪高島屋小林寛治来松。同店百選会の案内用紙に岩坂紙を選定されたが、大量注文はこれが初めて。
- 3月1日 島根県商品陳列所内に民藝室を特設させた。
- 4月5日 森永の主唱により設立された安来織物組合を改組して、安来民藝協会が創立され会長に原本虎一郎が推された。
4月15日発行の雑誌『工藝』で、石州匹見上村の紙布、岩坂紙の各種及び製紙工程が紹介された。
- 4月17日 第3回島根民藝展を松江商工会議所で3日間催し、21日展覧会の決算かたがたの二の丸の二松亭で総会を開く。
- 5月27日 さつき会主催の島根民藝展が倉敷市で3日間開催され、船木・福岡が出張した。
6月18日発行の雑誌『工藝』で、松江産の茶碗籠、竹矢村の藁箒が紹介された。
- 7月4日 安来民藝協会創立記念展覧会が、安来町商工会館で2日間開かれた。
- 9月10日 福岡へ転任の楠大毎支局長を二の丸の二松亭に招き、ぼてぼて茶で送別会を開いた。
- 9月16日 柳来松。翌日、布志名と袖師に案内した。
- 10月13日 柳のあっせんで、近く布哇(ハワイ)で日本民藝品展覧会が開かれるので出品した。
- 10月20日 全国総合民藝展が南海高島屋で6日間開かれ、尾野・安部(榮)が出張。
- 10月21日 船木が松江商工会議所で更生第1回個展を3日間開いた。
11月8日発行の雑誌『工藝』で、尾野の土瓶・船木の皿・金田の本立てが紹介された。
- 11月11日 松江商工会議所で3日間、芹澤銑介・外村吉之介・柳悦孝の染織展を開き、外村が来松した。

昭和9年(1934)

- 1月1日発行の第37号より12月17日発行の第48号まで雑誌『工藝』は安来織を表紙とし、本文には第37号より第40号まで岩坂の紙、第41号より第48号まで石州市山の楮紙が使用された。
- 2月19日 山陰民藝展が京都高島屋で3日間開かれ、太田と鳥取の山本龍蔵が出張した。
2月20日から3日間、太田が東京の柳、たくみ店などを歴訪して、種々打ち合わせをした。
2月25日発行の雑誌『工藝』で、湯町の天才茶碗・布志名の型皿が紹介された。
- 3月12日 日本現代民窯展が東京上野松坂屋で7日間開かれた。
- 4月14日 総会を開いて本年度の行事につき種々協議し、夕方より二の丸の二松亭で観桜かたがたの晩餐会を催した。
- 5月10日 船木道忠が国画会から国展賞を授与された。邦人陶工としては最初のことである。
- 5月20日 岩坂紙の展覧会が、東京たくみ店で6日間開かれる。
- 6月9日 船木は民窯視察のため唐津・高取・白石・日田・二川・苗代川を一巡して、21日帰着した。
- 8月1日 英人(バーナード)リーチ来松。会員一同駅に出迎えて、袖師・布志名の諸窯に案内した。氏は同夜より玉造の豆腐屋旅館に滞在して、毎日船木の工房で制作に従事する。
- 8月6日 夜、玉造の保性館において大毎松江支局主催でリーチを中心とする民藝座談会が開かれた。出席8名。
- 8月9日 夜、宍道湖上に舟を浮かべてリーチの歓迎会を開き、翌10日はリーチ、壽岳文章を岩坂に案内した。リーチは製紙工程を順次フィルムに収めた。
- 8月13日 リーチは会員と枕木山に上って独特の手料理を饗し、同夜帰東したので別れに臨んで皆美館の庭前で記念撮影した。枕木に登った人々は、リーチ・原本・河井・船木・尾野・福岡・安部兄弟・森山・太田妻。
- 8月29日 リーチの作品が焼きあがったので、会員34名船木の工房に集まった。
- 10月9日 船木は栃木県益子町へ出張。濱田庄司の工房に滞在して製作に没頭し、12月7日約千点の作品を携えて帰り、12月14日より3日間(松江市)公会堂で個展を開いた。
- 10月28日 安部榮四郎は多年の宿望成り、印刷局抄紙部で溜漉法見習いのため東上、12月17日帰郷した。
- 10月29日 山陰民藝展が京都高島屋で3日間開催され、尾野が出張した。
- 11月16日 東京高島屋で未曾有の全国新興民藝展が7日間開催され、尾野・船木・安部(榮)・太田が出張した。
- 11月23日 島根県物産展示即売会が福岡の玉屋百貨店で3日間開催され、安部(梅)・福岡が出張する。福岡は序をもって二川・高取の窯場を視察した。
- 12月17日 松江商工会議所で総会を開き、引き続き東本町の平八で忘年会を催した。出席者は、原本・森永・金田・船木・尾野・福岡・安部(榮)・森山・太田、飛入りに仙田。

【資料2】太田直行による柳宗悦追悼談（「島根新聞」1961年5月10日）

柳宗悦先生をしのぶ（下）

松江市母衣町 太田 直行



太田直行（『松江商工会議所
四十年誌』1934年刊より）

私が柳先生を知ったのは昭和四年、御大典記念博覧会に柳先生が京都の民芸協団としてモデル民家を出品された際河井寛次郎氏との縁故から私もお手伝いして、モデル民家の中に陳列する家具を出雲地方からかり集め、京都へ行ったときである。かねて柳先生の考え方に共鳴していた私は、その折り一層先生の民芸論にひかれ、翌々年の昭和六年に雑誌「民芸」が創刊されて、いよいよ民芸運動がすべり出した機会に早速、島根県へ招き、工芸診察として県下をみてもらった。

私と当時の大毎松江支局長楠五郎氏が同行し、五月四日、津和野をふり出しに益田、浜田、大森、温泉津、大田、今市、布志名、松江、広瀬、安来と一週間にわたって行脚した。竹細工屋、荒物屋などをのぞき、それも店の前でなく縁の下や座の下、棚の一番奥の方をひっくりかえして、いいものがあればそれを作っている所へも足を延ばして指導し、また各地で製作者、関係機関、愛好者を集めて座談会を開くなど精力的な探美行だった。

こうして新しい息吹き、考え方に目を開かれた県下の関係者たちは、早速その翌月から柳先生の集められた全国の工芸品を借り受け松江、温泉津、浜田で展覧会を開き、さらに直接先生の来県を得て講演や指導を願うなど島根の民芸運動を起こしていったわけである。当時、県下の工芸作家たちは商工省主催商工展に連続入選しながらも、その実は一様に行きづまりを覚え、困迷摸索していただけに、極言すれば死中に活を入れられたほどの大きな転機になったものである。

柳先生の目は、どんな片すみに埋もれている美も磁石が鉄片をひき出すように決して見逃がさぬほどに正確で、早かった。そしてねらったものには一直線にぶつかる一途なところがあった。私が母の遺作である広瀬がすりのふとんを愛蔵していたところ「切って一切れくれ」といい出しとうとう進呈せざるを得ない羽目になった思い出もある。またそこらにおいてあるもので気に入れば勝手に持って帰るし、経済観念を度外視して熱につかれたように品物を買ひ込み、支払いの方はクロッと忘れていう一面もあった。しかしそれでいて腹のたたない、にくめない人だった。主義主張のためには一切を無視してかかる教祖のような一面をもつ人だったと思う。

しかし神ならぬ柳先生に矛盾を感じるところもあった。先生は民芸品生産の仕組みは十六世紀のギルド制でなければならぬといわれた。親方が工人を管理する親方制度を再現せよというわけだが、実際問題として産業革命以後のこのまで発達した自由経済のもとでは、十六世紀への逆もどりは不可能な話だ。この点で意見対立しけんか別れた人もある。先生はあくまでも目と頭で指導すべき人であり、経済面では実情にあわぬ面もあった。この点でのちに民芸運動が一つのジレンマにおちいったこともあるが、いずれにしても精神運動の推進者としてはまたと得難い偉大な人であり、その足跡は不滅のものである。（談）

（『松江市史』史料編10「近現代Ⅱ」掲載予定）

柳宗悦先生をしのぶ

（下）

松江市母衣町 太田 直行

柳先生を知ったのは昭和四年、御大典記念博覧会に柳先生が京都の民芸協団としてモデル民家を出品された際河井寛次郎氏との縁故から私もお手伝いして、モデル民家の中に陳列する家具を出雲地方からかり集め、京都へ行ったときである。かねて柳先生の考え方に共鳴していた私は、その折り一層先生の民芸論にひかれ、翌々年の昭和六年に雑誌「民芸」が創刊されて、いよいよ民芸運動がすべり出した機会に早速、島根県へ招き、工芸診察として県下をみてもらった。

私と当時の大毎松江支局長楠五郎氏が同行し、五月四日、津和野をふり出しに益田、浜田、大森、温泉津、大田、今市、布志名、松江、広瀬、安来と一週間にわたって行脚した。竹細工屋、荒物屋などをのぞき、それも店の前でなく縁の下や座の下、棚の一番奥の方をひっくりかえして、いいものがあればそれを作っている所へも足を延ばして指導し、また各地で製作者、関係機関、愛好者を集めて座談会を開くなど精力的な探美行だった。

こうして新しい息吹き、考え方に目を開かれた県下の関係者たちは、早速その翌月から柳先生の集められた全国の工芸品を借り受け松江、温泉津、浜田で展覧会を開き、さらに直接先生の来県を得て講演や指導を願うなど島根の民芸運動を起こしていったわけである。当時、県下の工芸作家たちは商工省主催商工展に連続入選しながらも、その実は一様に行きづまりを覚え、困迷摸索していただけに、極言すれば死中に活を入れられたほどの大きな転機になったのである。

柳先生の目は、どんな片すみに埋もれている美も磁石が鉄片をひき出すように決して見逃がさぬほどに正確で、早かった。そしてねらったものには一直線にぶつかる一途なところがあった。私が母の遺作である広瀬がすりのふとんを愛蔵していたところ「切って一切れくれ」といい出しとうとう進呈せざるを得ない羽目になった思い出もある。またそこらにおいてあるもので気に入れば勝手に持って帰るし、経済観念を度外視して熱につかれたように品物を買ひ込み、支払いの方はクロッと忘れていう一面もあった。しかしそれでいて腹のたたない、にくめない人だった。主義主張のためには一切を無視してかかる教祖のような一面をもつ人だったと思う。

しかし神ならぬ柳先生に矛盾を感じるところもあった。先生は民芸品生産の仕組みは十六世紀のギルド制でなければならぬといわれた。親方が工人を管理する親方制度を再現せよというわけだが、実際問題として産業革命以後のこのまで発達した自由経済のもとでは、十六世紀への逆もどりは不可能な話だ。この点で意見対立しけんか別れた人もある。先生はあくまでも目と頭で指導すべき人であり、経済面では実情にあわぬ面もあった。この点でのちに民芸運動が一つのジレンマにおちいったこともあるが、いずれにしても精神運動の推進者としてはまたと得難い偉大な人であり、その足跡は不滅のものである。（談）